

# 世界漫遊

ダウイット Jacob Julius David

森鷗外訳

青空文庫



ウイインで頗る勢力のある一大銀行に、先ずいてもいなくても差支のない小役人があつた。名をチルナウエルと云う小男である。いてもいなくても好いにしても、兎に角あの大銀行の役をしているだけでも名誉には違いない。

この都に大勢いる銀行員と云うものの中で、この男には何の特色もない。風采はかなりで、極力身なりに気を付けている。そして文士の出入する珈琲店に行く。

そこへ行けば、精神上の修養を心掛けていると云う評を受ける。こう云う評は損にはならない。そこには最新の出来事を知つていて、それを伝播させる新聞記者が大勢来るから、噂評判の源にいるようなものである。その噂評判を知ること、先ず益があつて損のない事である。

この店に這入つて据わると、誰でも自分の前に、新聞を山のように積み上げられる。チルナウエルもその新聞の山の蔭に座を占めていて、隣の卓でする話を、一言も聞き漏さないように、気を付けている。中には内で十分腹案をして置いて、この席で「洒落」の広めをする人がある。それをも聞き漏さない。そんな時心から笑う。それで定連に可哀がられている。こう云う社会では「話を受ける」人物もいなくてはならないのである。

こんな風で何年か立つた。

そのうちある時、いつも話の受け手にばかりなっていた、このチルナウエルが忽ち話題になった。多分当人も生涯この事件を唯一の話の種にすることであろう。それをなんだと云うと、この男は世界を一周した。そこで珍らしい人物ばかり来るこの店でさえ、珍らしい人物として扱われるようになったのである。この男がその壮遊をしたのは、富籤とみくじに当たったのではない。また研究心に促されて起つたのではない。この店の給仕頭は多年文士に交際しているので、人物の鑑識が上手になつて、まだ鬚ひげの生えない高等学校の生徒を相しそうて、「あなたはきつと晩年のギョオテのような爛熟らんじゆくした作をお出しになる」なんぞと云うのだが、この給仕頭の炬きよの如ごとき眼光を以もつて見ても、チルナウエルを研究家だとすることは出来なかつたのである。それから銀行であるが、なるほどウイインの銀行は、いなくても好い役人位は置く。しかしそれに世界を漫遊させる程、おうような評議會を持つている銀行は、先まずウイインにも無い。

\*

\*

\*

文士珈琲店の客は皆知り合みないである。その中に折々来る貴族が二人あつた。それが来るのを、定連は名譽めいよとしてゐる。二人共陸軍騎兵中尉で、一人は竜騎兵、一人は旃騎兵はいきへいに

属している。

中にもどこへ顔を出しても、人の注意を惹くのは、竜騎兵中尉の方である。画にあるような美男子である。人を眩するような、生々とした気力を持っている。馬鹿ではない。ただ話し振りなどがひどくじだらくである。何をするにも、努力とか勉強とか云うことをしたことがない。そのくせ人に取り入ろうと思うと、きつと取り入る。決して失敗したことがない。

この二人は大抵極まった隅の卓に据わる。そしてコニヤックを飲む。往来を眺める。格別物を考えはしない。

用事があつてこの店へ来ることはない。金貸しには交際があるが、それはこの店を禁物にしていて近寄らない。さて文士連と何の触接点があるかと云うと、当時流行のある女優を、文士連も崇拜しているし、中尉達も崇拜しているに過ぎない。中尉達の方では、それに金を掛けていているだけが違う。それでも竜騎兵中尉は折々文士のいる卓に来て、余り気も附けずに話を聞いて、微笑して、コニヤックをもう一杯呑んで帰ることがある。

これが銀行員チルナウエルの大事件に出逢う因縁になったのである。チルナウエルはいつか文士卓の隅に据わることを許されていたのである。

ある日の事であった。まだ時間は早い。文士卓にはもう大勢団欒まといをしていて、隅の方に銀行員チルナウエルもいた。そこへ竜騎兵中尉が這入つて来て、平生の無頓着な、傲ごうま慢な調子でこう云つた。

「諸君のうちで誰か世界を一周して来る気はありませんか。」

ただこれだけで、跡はなんにも言わない。青天の霹靂へきれきである。一同暫くは茫然ぼうぜんとしていた。笑談じょうだんだろうか。この貴族先生の顔色を見るに、そうは受け取れない。世界を一周する。誰一人それを望まないものはない。しかしどんな条件があるのだろうか、誰も猶予する。

「僕がしましょう。」興奮の余りに、上うわ調子になつた声で、チルナウエルが叫んだ。

「その日数だけ休暇が貰もらえるかね。半年は掛かるよ。」中尉はこう云つて、小さい銀行員を、頭から足まで見卸した。

「ええ。僕がいないと、銀行で差支えるのですが、どうにかして貰えないことはなかろうと思います。」実はこれ程容易な事はない。自分がいなくても好いことは、自分が一番好く知っているのである。

「宜よろしい。それじゃあ、明みょう日にち邸やしきへ来てくれ給たまえ。何もかも話して聞せるから。」中尉はくるりと背中を向けて、同僚と一しよに店を出て行つた。

門かどぐち口ぐちに出ると、旃騎兵中尉が云つた。

「あれは誰だい。君に、君だの僕だのという、あの小男は。」

「僕と話をする時、君僕と云う男を一々覚えていられるものか。」尤もつともである。竜騎兵中尉と君僕の交換をしている人はむやみに多いのだから。殊またに少し酒が廻まわっていると、君僕の交際範囲が広くなる。そこで一いつたん旦君僕で話をした人に、跡で改まった口上も使いにくい。とうとう誰たれ彼かれとなく君僕で話す。先方がそれに応ずると否とは、勝手である。竜騎兵中尉はこの返事をして間もなく、「そんなら」と云つて、別れそうにした。

「どこへ行く。」

「内へ帰る。書きものがある。」

「書きもの。」旃騎兵中尉は、「気が違つたかい」と付け加えたかつたのを、我慢して呑み込んだ。

「うん。書きものだ。」こう云うとたんに、丁度美しい小娘がジュポンの裾すそを撮つまんで、ぬかるみを跨またごうとしているのを見附けた竜騎兵中尉は、左の手につか握つかっていた軍刀を高

く持ち上げて、極めて熱心にその娘の足附きを見ていたが、跨いでしまったのを見届けて、長い脚をおおまた大股に踏んで、その場を立ち去った。

\*

\*

\*

陸軍竜騎兵中尉伯爵ポルジイ・キルヒネツゲルは實際邸へ帰った。そして夜の更けるまで書きものをしていた。友達の旆騎兵中尉は、「なに、色文いろふみだろう」と、自ら慰めるように、跡で独言ひとりごとを言っていたが、色文なんぞではなかった。

ポルジイは非常な決心と抑えた怒いかりとを以て、書きものに従事している。夕食にはいつも外へ出るのだが、今日は従卒に内へ持つて来させた。食事の時は、赤葡萄酒ぶどうしゆを大ぶ飲んで、しまいにコニヤックを一杯飲んだ。

翌日まだ書いている。前日より一層劇はげしい怒を以て、書いている。いやな事と云うものは、する時間が長引くだけいやになるからである。午頃ひるごろになつて、一寸町ちよつとへ出た。何か少し食つて、黒ビールを一杯引つ掛けて帰つて、また書いている。

ようよう銀行員の来る前に書いてしまった。右の腕を、虚空を研きるように、猛烈に二三度振つて、自分の力量と弾力との衰えないのを試めして見て、独りみづか自ら喜んだ。それから書いたものをざつと読んで見た。かなりの出来である。格別読みづらくはない。いよいよ

遣らなくてはならないとなると、遣れるものだと、自分で満足した。

そう思うと同時に、平生の傲慢が萌す。幸な事には、いつまでもこんな事をする必要がない。出来たからつて、えらがるのは、沙汰の限りだ。こう思うと、頗る愉快になつて来た。

その時銀行員は戸を叩いた。ポルジイは這入らせはしたが、ちよつと誰だつたか、何の用で来させたかと云うことを忘れて、ようよう思い出した。それから頗る慇懃に待遇した。

さて一切の用件を話して聞せた。

それを聞いたチルナウエルには、なぜそんな事をさせられるのかは、分からないが、どんな事をすれば好いと云うことだけは、すっかり飲み込めた。チルナウエルも気の利いた男でポルジイも物をはつきり言う男だからである。そのはつきり言うのは、軍隊で命令をしつけているからである。

チルナウエルは地図、旅行案内、紹介状、旅行券を受け取った。紹介状はどこで誰に渡せと云うことを、一々はつきり言い附けられた。そして少からぬ金額を旅費として受け取った。最後に暇乞をしよとした時、名所記類を一山授けた。ポルジイは頭痛に病み

ながら、これを調べたのであった。

さてこの一切の物を受け取って、前に立っている銀行員を、ポルジイ中尉は批評眼で暫く見て、余り感心しない様子で云った。

「君も少し姿勢がどうかならんかねえ。気を付けて見給え。損の行かない話だ。」

これは少し冤罪であつた。勿論この銀行員の風采は、伯爵中尉と比べることは出来ない。しかし世間並から言えば、かなりの男振りで、立派に通用するのである。

ポルジイは暇を遣るとき握手して遣ることは出来なかつた。それは自分の手が両方共塞がっていたからである。右には紙巻烟草を持っていた。左には鞭を持っていた。鞭を持っていたのは、慣れない為事で草臥れた跡で、一鞍乗って、それから身分相応の気晴らしをしようと思つたからである。

その晩のうちにチルナウエルは汽船に乗り込んで、南へ向けて立つた。最初に着く土地はトリエストである。それから先きへ先きへと、東の方へ向けて、不思議の国へ行くのである。

さて到る処で紹介状を出すと、どこでも非常に厚く待遇する。いかに自分の勤めている銀行が大銀行だとしても、その中のいてもいなくても好い役人の受くべき待遇ではない。

そこでチルナウエルは次第に小さい銀行員たることを忘れて、次第に昔話の魔法で化され  
た王子になりました。

珈琲店では新しい話の種がたつぷり出来た。伯爵中尉の気まぐれも非常であるが、小さい銀行員の僥倖ぎようこうも非常である。あんな結構な旅行を、何もあのチルナウエルにさせないでも好きそうなものだ。誰だつて同じ旅行が出来たら、あの男よりは有利にそれをし遂とげるだろうに。

チルナウエルの旅程が遠くなればなる程、跡に残っている連中の悪口はひどくなる。もう幾月か立ったので、なんに附けても悪く言う。葉書が来ない。そりや高慢になった。来た。そりや見せびらかす。チルナウエルの身になつては、どうして好いか分からない。

竜騎兵中尉も消え失せたうようにいなくなつた。いつも盛んな事ばかりして、人に評判せられたものが、今はどこにいるか、誰も知らない。

\*

\*

\*

ポルジイは大した世襲財産のある伯爵家の未来の主人である。親類には大きいあまでら尼寺の長老になつているあまぎみ尼君が大勢あつて、それがこの活潑かっぱつな美少年を、やたらに甘やかすのである。

二三年勤める積つもりで、陸軍には出た。大尉になり次第罷やめるはずである。それを一段落として、身分相応に結婚して、ボヘミアにある広い田畑を受け取ることになっている。結婚の相手の令嬢も、疾とづくに内定してある。令嬢フィニイはキルヒネツグ領のキルヒネツゲル伯爵夫人になるのが本望である。この社会では結婚前は勿論、結婚してからも、さ程嚴重に束縛せられないと云うことを、令嬢は好く知っているのである。

勿論ポルジイの品行は随分ひどい。しかし女達に追い廻まわされている男だと云う所を酌量して遣らなくてはならない。馬は目醒めざましい上手である。その外青年貴族のするような事には、何にも熟練している。馬の体の事は、毛櫛けくしが知っているより好く知っている。女の容色の事も、外に真似手のない程精くわしく心得ている。ポルジイが一度好いと云った女の周囲には、耳食じしょくの徒とが集まって来て、その女は大幣おおぬぎの引手ひくてあまたになる。それに学問と云うものを一切していないのが、最も及ぶべからざる処である。うぶで、無邪気で、何事に逢あつても挫折ざせつしない元氣を持つている。物に拘泥こうでいしない、思索と云うことをしない、純血な人間に出来るだけの受用をする。いつも何か事あれかしと、居合腰いあいこしをしているのである。

それだから金かねのいること夥おびただしい。定額では所詮しよせん足らない。尼寺のおばさん達が、表

面に口小言くちごごとを言つて、内心に驚きょうたん歎たんしながら、折々送つてくれる補助金を加えても足らない。ウイーン市内で金貸業をしているものは多いが、一人にんとしてポルジイと取引をしたことのないものはない。いざ金があると、ポルジイはどんな危険な相談にでも乗る。お負まけにそれを洒々しゃしゃらくらく落お々々たる態度で遣つて除のける。ある時ポルジイはプリユウンという果くだものの干したのをぶら下げている。それはボスニア産のプリユウン二千俵を買つて、それを仲買に四分の一の代価で売り払つた時の事である。これ程の大損をさせるプリユウンというものを、好くも見ずに置くのは遺憾いかんだと云つて、時計の鎖くわに下げたのである。またある時はどこかの二等線路を一手に引き受けられる程の数の機関車すうを所有していた。またある時は、平生活人画かつじんが以上の面白味は解かせないくせに、歴代の名作のある画廊わうきを経営していた。一体どうしてこんな事件に続々関係するかと云うに、それはこうである。塙わうき匈ようえい国こくでは高利貸しが厳禁せられている。犯すと重い刑に処せられる。そこで名義さえ附くと好い。ボスニア産のプリユウンであろうが、機関車きかんしゃであろうが、レンブラントの名画であろうが、それを大金で買つて、気に入らないから、直ぐに廉価に売るのは、何の差支もない。これは立派な売買である。仲買にたっぷり握らせて、自分も現金を融通する。仲買は公民権を失うような危険を冒さずに済むのである。

丁度この話の出来事であった時、いつも女に追い掛けられているポルジイが、珍らしく自分の方から女に懸想けそうしていた。女色じょしよくの趣味は生来解かしている。これは遺伝である。そこで目差す女が平凡な容貌ようぼうでないことは、言うまでもない。女は女優である。遊んだり、人のおもちやになつたりしていずに、少し稽古けいこでもしたら、立派な俳優になつた女かも知れない。どうかして舞台上うまで旨い事をしたのを、劇評家が見て、あれは好く導いて発展させたら、立派なものになるだろうにと、惜おしんで遣ることもある。しかしその発展が出来ないで、永遠に愛くるしい見せ物に甘んじている。その名はドリスである。

ドリス自身には、技芸ぎげいの発展が出来なくて気の毒だのなんのと云つたつて、分からないかも知れない。結構けいこうづくめの境界きょうがいである。崇拜者に取り巻かれていて、望みなら何一つかな悩まないことはない。余り結構過ぎると云つても好い位である。

ドリスは可哀らしい情婦としてはこの上のない女である。不機嫌な時がない。反抗しない。それに好い女と云う意味から云えば、どの女だつてドリスより好く見えようがない。人を悩殺する媚こびがある。凡すべて盛りの短い生物いきものには、生活に對する飢渴があるものだが、それをドリスは強く感じてゐる。それが優しい、褐色の、余り大きいとさえ云いたいような、余りきらきらする潤いが有り過ぎるような目の中から耀かがやいて見える。

無邪気な事は小児のようである。軽はずみの中にさえ、子供めいた、人の好げな処がある。物を遣れば喜ぶ。裝飾品が大好きである。それはこの女には似合わしい事である。さてそんならその贈ものばかりで、人の自由になるかと云うと、そうではない。好きな人でなくては靡かない。そしてきのう貰った高価の裝飾品をでも、その贈主がきよう金に困ると云えば、平気で戻してくれる。もしその困る人が一晚の間に急に可哀なつた別人なら、その別人にでも平気で投げ出してくれる。

ポルジイとドリスとはその頃無類の、好く似合つた一对だと称せられていた。これは誰でもそう思う。どこへでも二人が並んで顔を出すと、人が皆囁き合う。男はしっかりして危げがなく、氣力が溢れて人を凌いで行く。女はすらりとして、内々少し太り掛けていると云う風の体付きである。まるで娘のように見える。手なんぞは極小くて、どうしてあれで大金を払い出すことが出来るだろうと怪まれる。一体金と云う概念については、この女程分からずにいるものは少かろう。その位だから、我身の未来なんぞと云うことも、秘蔵子が考えないと同じように考えないでいる。

こう云う二人が出逢つたのだから、面白く月日を送ることは、この上もない。勿論その入費は非常である。ポルジイのドリスを愛することは、知り合いになつてから、月日が立

つと共に、深くなつて来る。どんなに面白い女か、どんな途方もない落想らくそうのある女かと云うことが、段々知れて来るのである。貴族仲間の禁物は退屈と云うものであるに、ポルジイはこの女と一しよにいて、その退屈を感じたことが、かつてない。ドリスはフランス語を旨く話す。立居振舞は立派な上流の婦人であつて、その底には人を馬鹿にした、大胆な行を隠している。ピアノを上手に弾いて、クプレエを歌う。その時は周囲が知らず識らずあいだの間に浮かれ出してしまふ。先ずこんなわけで、いつの間にかポルジイは真面目まじめにドリスに結婚を申し込んだと云う噂うわさが伝えられた。

これはひどく人の耳目を聳しょう動どうした。尤もこれに驚かされたのは、ストロオガツセなる伯爵キルヒネツゲル家の邸の人々である。

邸あたりでは、人生一切の事物をただ二つの概念で判断している。曰いわく身分相応、曰く身分不相応、この二つである。ポルジイがドリスを困つて世話をして置く。これは身分相応の行為である。なぜと云うに、あれは伯爵の持物だと云われても、恥ずかしくない、意気な女だからである。どうもそれにしても、ポルジイは余り所嫌わずにそれを連れ歩くようではあるが、それは兎角やすそうなり易やすい習ならいだと見れば見られる。しかしドリスを伯爵夫人にするとなると、それは身分不相応の行為である。一大不幸である。どうにかして妨害せ

ねばならぬ。

さてどうしたものでらう。困る事には、ポルジイは依怙地えこじな奴やつで、それが出来ないなら云々うんうんすると、暗に種々の秘密を示して脅おびやかす。それが総すべて身分不相応な事である。そこで邸いででは幾度いくたびとなく秘密の親族会議が開かれた。弁護士や、ポルジイと金銭上の取引をしたもの共が、参考に呼び出される。プラハとウイーンとの間を、幾人かの尼君達が旅行せられる。實際鉄道庁で、この線路の列車の往復を一時増加しようかと評議をした位である。無論急行で、一等車ばかりを聯結れんけつしようとするのであった。

その会議の結果はこうである。親族一同はポルジイに二つの道を示して、そのどれかを行わなくてはならないことにした。その一は軍職を罷めて、耕作地の経営に長じているという噂のあるおじさんのいる、スラヴ領の莊園そうえんに行つて、農業を研究するのである。ポルジイはこれを承うけたまわつて、乱暴にも、「それでは肥料車こえぐるまの積載つみおろしの修行をするのですな」と云つた。その二は世界を一周して来いと云うのである。半年程留守を明けて、変つた事物を見聞して来るうちには、ドリスを忘れるだろうと云うのである。勿論漫遊だつて、身分相応にするので、見て廻らなくてはならない箇所が頗る多い。奥匈おうきょう国で領事の置おいてある所では、必ず面会しなくてはならない。見聞した事は詳細に書き留とめて、領事の証

明書を添えて、親戚しんせきに報告しなくてはならない。

ポルジイは会議の結果に服従しなくてはならない。腹を立てて、色々な物を従卒に打ち付けてこわした。ドリスを棄すてようか。それは「絶待」に不可能である。少し用心深く言つたところで、「当分」不可能である。罷職ひしよくになつて、スラヴ領へ行つて、厚皮の長靴を穿はく。飛んでもない事だ。世界を一周する。知識欲が丸でなくて、紀行文を書くなんて云うことに興味を有せない身にとっては、余り馬鹿らしい。

こう考えた末、ポルジイは今時の貴族の青年も、偉大なる恋愛のためには、いかなる犠牲をも辞せないと云うことを証明するに至つた。ポルジイは始めて思索を費した。大部の紀行類を読んだ。そして意気な女と遊ぶ夜を、寂しい我居間に閉じ籠こもつていて、書きものをした。

\*

\*

\*

銀行員は遠く、いよいよ遠く故郷の空を離れて、見馴なれぬ物という物を見て歩く。言い附けられた事は、きちんきちんとする。それ程込み入つて、覚えていにくいような事ではない。言語挙動も役相応に見られるようになった。訪問すべき人を訪問して、滞留日数に応じて何本と極めてある手紙を出した跡は、自分の勝手な楽もする。段々鋭くなった目で

観察もする。

しかし一つの恐怖心が次第に増長する。それは不意に我身の上に授けられた、夢物語めいた幸福が、遠からず消え失せてしまつて、跡には銀行のいてもいなくても好い小役人が残ると云うことである。少くも半年間は、いてもいなくても好いと云うことを、立派に上役から証明せられているのである。この恐怖心を懐いて、チルナウエルは生涯の思出だと思ひながら、出来るだけの受用をしている。

伯爵家では郵便が来る度に、跡継ぎの報告を受け取つて、その旅行の滞なく捗つて行くのを喜び、また自分達の計略の凶に当つたのを喜んでゐる。金は随分掛かる。しかし構わない。旅行は功を奏するに違ひないからである。それに報告が存外立派に書ける。殊に書物をも少しは読む尼君達さえ、立派だと云つて褒めて、学問をしなかつたのが惜しいと思つてゐる。伯爵夫人になりたがつてゐる令嬢にも、報告が気に入つてゐる。

\*

\*

\*

この間あいだポルジイとドリスとの二人は悪くない目に逢つてゐる。旅費に貰つた金を皆銀行員に遣るには及ばないから、かなりたつぷり除けて置いた。勿論今までのように途方もない贅ぜいたく沢は出来ない。

先ずノイリングバハに別荘を借りた。ウイインから急行で半時間掛かる。風景はなかなか好い。そして丸で人が来ない。そこに二人は気楽に住んでいる。風来もののドリスがどの位面白い家持ちをするかと云うことが、始て経験せられた。こせこせした秩序に構わないで、住心地の好いようにしてくれる。それになかなか品位を保っている。なんの役も勤まる女である。

二人きりで寂しくばかり暮しているというわけではない。ドリスの方は折々人に顔を見せないと、人がどうしたかと思つて、疑つて穿鑿せんさくをし始めようものなら、どんなまづい事になるかも知れない。詐偽さぎの全体が発覚すまいものでもない。そこで芝居へ稽古けいこに行く。買物に出る。デルビイの店へも、人に怪まれない位に、ちよいちよ顔を出して、ポルジイの留守を物足らなく思うと云う話をも聞く。ついでに賭かけにも勝つて、金かねを儲もうける。何につけても運の好い女である。

舞台が済んで帰る時には、ポルジイが人の目に掛からないように、物蔭に、外套がいとうの領えりを馬鹿に高く立てて、たたずんでいる。ヒュツテルドルフまで出迎えている時もある。停車場に來ている時もある。生死に關すると云う程でもなく、ちよいとした危険があるのを冒すのが、なんとも云えないように面白い。ポルジイはまだ子供らしく、こんなかくれん

坊の興味を感じる。ドリスも冒険という冒険が好きだから、同じように嬉しがる。芝居のない日には、朝から晩まで差向いで楽しむ。

折々極親しい友達を呼んで来る。内証の宴会をする。それがまた愉快である。どうかすると盛んな酒盛になる。ドリスが色々な思附きをして興を添えてくれる。ドリスが端倪すべからず、涸渇することのない生活の喜びを持つているのが、こんな時にも發揮せられる。この宴会に来たものは、永くその面白さを忘れずについて、ポルジイが柄にない、氣の利いた事をして、のん気に歓楽を極めているのを羨んだ。

こんな風に二人は、この山毛櫟に囲まれた片田舎で、これまでにない、面白い一春を過した。春というものの華やかさと楽しさとは、二人に迎合して遊ばせてくれた。轡を並べて遠乗をして、美しい谷間から、遙にアルピイの青い山を望んだこともある。

町に育つて芝居者になったドリスがためには、何もかも目新しい。その知らない事を言つて聞せるのが、またポルジイがためには面白い。ドリスが珍らしがるのは無理もない。これまでした旅行は、夏になつてイッシュルなぞへ行つただけである。景色が好いの、空氣が新鮮だのと云うのは言いわけで、実は外の樂しみの出来ない土地へ行つただけである。こんな風で休暇は立つてしまった。そして存外物入りは少かつた。

夏もいつか過ぎて、秋の雨が降り出した。ドリスはまた毎日ウイーンへ出る。面白い話を土産に持って帰る。楽屋落の処に、特殊の興味のあるような話で、それをまた面白く可笑しく話して聞せる。

しかしポルジイにはそれが面白くなくなつて来た。折角の話を半分しか聞かないことがある。自分の行きたくて行かれない処の話を、人伝に聞いては満足が出来なくなつた。あらゆる面白い事のあるウイーンは鼻の先きにある。それを行つて見ずに、ぐずぐずしていて、朝夕お極まりに涌き上がつて来る、悲しい霧を見ているのである。実に退屈である。ドリスがいかに巧みに機嫌を取つてくれても、歡樂の天地の外に立つて、中に這入る事の出来ない恨を霽らすには足らない。詰まらない友達が羨ましい。あの替玉の銀行員が、新しい物を見て歩いていられるのも羨ましい。いくら端倪すべからざるドリスでも、もう眺めていて目新しくはなくなつた。外の女よりは面白いに違いないが、やはり同じ女である。さてこうなつた所で、ポルジイはこれまで自分の身に覚えのない感情を発見した。それは妬である。ドリスの噂に上ぼる人が皆妬ましい。ドリスの逢つたと云う人が皆妬ましい。それに別荘は夏住まいに出来ているのだから、余り気持ちが好くなくなつた。その中で焼餅話をすると、いよいよ不愉快である。ドリスも毎日霧の中を往復するので

咳をし出した。舞台を休んで内にいる晩は、時間の過しように困る。女の話すことだけ聞くのに甘んじないで、根問いをすると、女はそんな目に逢ったことがないので厭がる。そして何の権利があつて、そんな事を問うのだから分らないとさえ思う。

とうとう喧嘩をした。ドリスは喧嘩が大嫌いである。喧嘩で、一たび失つたこの女の歡心を取り戻すことは出来ない。それはポルジイにも分かつているから、我ながら腑甲斐なく思う。しかし平生克己ということをしたことのない男だから、またしては怒りに任せて喧嘩をする。

ある日ドリスが失踪した。暇乞もせずに、こつそりいなくなつた。焼餅喧嘩に懲りたのである。ポルジイは独り残つて、二つの学科を修行した。溜息の音楽を奏して、日を数える算術をしたのである。

こう云うわけで、二つの出来事が落ち合つた。小さい銀行員が漫遊から歸つて来て珍らしがられると云うことが一つ、ポルジイ中尉が再びウイインの交際社会に現われたと云うことが一つである。そしてポルジイの事を知っている人々の間には、ドリスと切れて、身分相応な結婚をするそうだという噂が立つた。伯爵家の両親がこの成行に満足して、計略の當つたのを喜ぶことは一通りでない。実に可哀い子には旅をさせろである。

小さい銀行員はまた銀行に通い始めた。経験が出来たので、段々上の役に進む。妻を迎える。その家の食堂には、漫遊の記念品が飾ってある。小役人の家の食堂とは思われない。主人チルナウエルは客にこんな事を言う。「わたくしがラホレのマハラジヤの宮殿にいました時の事です」なんと云う。昔話をするのか、大法螺おわぼらを吹くのかと思われるのである。ところが、それが事実である。三方四方がめでたく納まった話であるから、チルナウエルは生涯人に話しても、一向差支はないのである。

(明治四十四年六月)

# 青空文庫情報

底本：「於母影 冬の王 森鷗外全集」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：米田

2010年8月14日作成

2011年4月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 世界漫遊

ダウイット Jacob Julius David

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>